平成30年9月27日
302会議室

平成30年第18回
立川市教育委員会定例会

立川市教育委員会

平成30年第18回立川市教育委員会定例会

1 日 時 平成30年9月27日(木)

開会 午後 1時30分

閉会 午後 3時15分

2 場 所 302会議室

3 出席者

教育長 小町 邦彦

教育委員 松野 登 田中 健一

伊藤 憲春 佐伯 雅斗

署名委員 伊藤 憲春

4 説明のため出席した者の職氏名

教育部長 栗原 寛 教育総務課長 庄司 康洋

学務課長 浅見 孝男 指導課長 小瀬 和彦

統括指導主事 森保 亮 教育支援課長 矢ノ口美穂

統括指導主事 川崎 淳子 学校給食課長 南 彰彦

生涯学習推進センター長 五十嵐 誠 図書館長 池田 朋之

指導主事 森山 健史

5 会議に出席した事務局の職員

教育総務課庶務係 西上 大助 井田 容子

案 件

1 報告

- (1) 初任者教員宿泊研修について
- (2) 平成30年度全国学力・学習状況調査の分析結果について～授業改善のポイント～
- (3) 就学相談に関するアンケートの実施について（報告）

2 その他

平成30年第18回立川市教育委員会定例会議事日程

平成30年9月27日

302会議室

1 報告

- (1) 初任者教員宿泊研修について
- (2) 平成30年度全国学力・学習状況調査の分析結果について～授業改善のポイント～
- (3) 就学相談に関するアンケートの実施について（報告）

2 その他

◎開会の辞

○小町教育長 ただいまから、平成30年第18回立川市教育委員会定例会を開催いたします。

署名委員に伊藤委員、お願いいたします。

○伊藤委員 はい。

○小町教育長 次に議事内容の確認を行います。本日は、報告3件であります。その他は、議事進行過程で確認をいたします。

次に、出席者の確認を行います。栗原教育部長、お願いいたします。

○栗原教育部長 本日の第18回立川市教育委員会定例会への出席管理職でございますが、教育部長、教育総務課長、学務課長、指導課長、川崎統括指導主事、森保統括指導主事、教育支援課長、学校給食課長、生涯学習推進センター長、図書館長でございます。

◎報 告

(1) 初任者教員宿泊研修について

○小町教育長 それでは、1報告(1)初任者教員宿泊研修について、を議題といたします。

小瀬指導課長、お願いいたします。

○小瀬指導課長 では、森山指導主事より、ご報告をさせていただきます。

○森山指導主事 私からは、平成30年度正規採用教員30名を対象とした宿泊研修が、今年度も立川市八ヶ岳山荘において、滞りなく行われたことについて、ご報告をいたします。

出発式では、小瀬指導課長から激励の言葉とともに、この研修のめあてが示されました。

1つ目は、教育公務員として行動すること、2つ目は、様々な教育活動に対する実践力を習得すること、3つ目は、特別の教科 道徳の指導力向上を図ることです。

移動中のバスでは、これまでの経験やこの研修に対する抱負など、自己紹介をしました。

なかには陸上の全国大会経験者やTOEICで560点を獲得した小学校教員もいれば、あさって結婚式を挙げるので絶対に日焼けできない花嫁など、様々な初任者が研修に参加いたしました。

宿舎での開校式では、川崎統括からの挨拶と、初任者からの決意の言葉が述べられました。

宿舎での最初の食事は自炊です。ここでは児童・生徒の自然教室への引率を想定して、安全指導のポイントや調理の仕方を実際に経験しました。山梨名物のほうとうが鍋いっぱいにできましたが、さすがは若者、全てのグループが完食をいたしました。

休む間もなく授業改善の講義です。ここでは日々の道徳授業を見直す視点が示されました。これは事前課題の学習指導案を講義で示された視点にしたがって再検討している様子です。この検討をもとに、初任者ご覧のようなグループ課題を設定しました。板書や発問の工夫、思考する場面や振り返りの重視など、指導技術や授業づくりに関する適切な課題が設定されていることが分かります。

つかの間の休息时间です。早朝から1日過ごした仲間たちと自然と会話がはずんでいました。また、入浴後、私服に着替えてノーメイクで再会したので、それはそれで会話がはずんでいました。

夕食後から就寝までは自主研修の時間です。グループ課題に対する改善策を模索したり、模擬授業形式での発表を想定した教材づくりを非常に熱心に行っていました。

2日目の朝の様子です。朝の会やラジオ体操の進行、食事の挨拶は、引率時を想定して初任者が自分たちで行います。普段は朝早くから夜遅くまで職員室にいたので生活リズムが整わない初任者ですが、宿泊では規則正しい生活が送れるのもこの研修の魅力です。

午前中は講義と演習が続きます。八ヶ岳の難点は標高が高いため、もともとエアコンの設備がないこと。猛暑の今年は各部屋に扇風機が支給されました。また、発表のために使える教材も学校のように潤沢ではありません。教師にとっては、こうした限られた資源や環境の中で最大限の授業提供することも重要なスキルの一つです。

これは食物アレルギー研修の様子です。平成24年に起こった調布市の事例を踏まえて、未然防止や早期対応の重要性が解説されました。これはエピペンの扱い方を実習している様子です。今の学校ではアナフィラキシーショックの既往がある児童生徒はエピペンを所持している場合が少なくありません。そのため、全ての教員にはエピペンを適切に扱う知識と技能が求められます。

午後からは初任者が楽しみにしていたハイキングの現地研修です。私の道徳の講義よりずっと盛り上がっていました。しかし、ただのハイキングというわけにはいきません。ハイキング中は順路の案内や隊列の状況確認、休憩場所の設定や時間の確保など様々な判断が求められます。この研修ではグループで順番に先頭を交替し、そうしたポイントについて実習をしました。公園からの景色や、美し森でのソフトクリームは格別でした。

そんな初任者たちでしたが、宿舎に到着した直後はさすがに疲れた様子でした。長めの休息と入浴、たっぷりの夕食、そして小町教育長から差し入れていただいたコーヒーとお煎餅で元気をとり戻しました。ありがとうございました。

夕食後は、明日の発表に向けて自主研修です。役割を分担し、作った教材を実際に使いながらリハーサルを行っています。

3日目の朝です。宿泊研修の集大成とあって、どこことなく緊張感が漂います。

いよいよ宿泊研修のメインイベント、道徳の授業改善について模擬授業形式による成果発表です。

小学校1年生の担任で構成されたE班は、役割演技を通して登場人物の気持ちを掴ませること。気持ちの変化を比較し思いやりとは何かに気づかせることが大切だと発表しました。

小学校2年生の担任で構成されたF班は、課題に対して実感がわかないといった低学年ならではの課題に対して、自分に置き換えて共感させる場面を設定することが有効だと発表しました。

小学校3年生の担任で構成されたG班は、自分の気持ちや考えを心のメーターとして可視

化することで意見を比べる必然性が生じ、児童の思考が深まることが期待できると発表しました。

小学校特別支援学級の担任で構成されたA班は、判読だけでなく、教師が動作化して場面の様子を掴ませることや、児童の実演を大いに褒めることで望ましい行動を定着させる手法を発表しました。ちなみに、この初任者の演技力が良すぎて、次の班は発表がしにくそうでした。

小学校特別支援教室の担任で構成されたB班は、一目で分かる板書として、掲示物の活用や板書する際の留意点について発表しました。

小学校4年生の担任で構成されたH班は、登場人物が2人以上いる題材については、役割演技をするときには、どちらか一方ではなく、双方演じることが相手の気持ちに気付くことにつながると発表しました。

小学校5・6年生の担任で構成されたI班は、命を扱うような繊細なテーマの題材では、児童から率直な意見が出ずに表面的になりやすいといった課題から、振り返りの場面であえて発表しないことを前提に、自己の内面を真剣に見つめさせることが有効だと発表しました。

中学校1年生の担任で構成されたC班は、生徒に葛藤させるためには、主発問が大切であるとして、解決手段が多様に想定できる主発問や、その後の意見交換の仕方について発表しました。

中学校2年生の担任で構成されたB班は、登場人物が複数いる場合の実践について、板書の仕方や、そこから意見を収束させて共通する価値を生徒に見出させる方法を発表しました。ちなみに、この班だけ体育会系男性3人での構成だったので絵についてはご覧のような結果となりました。

最後に、川崎統括から道徳の発表や宿泊研修全体について指導、講評をいただきました。激励の言葉を頂戴し、初任者の表情には、これからも頑張るという意欲が表れていたように感じます。

宿舎での最後の食事の場面では、仲間の誕生日をサプライズでお祝いするという感動的な演出もありました。こうした温かい心遣いは、きっと教室でも実践されるものと期待をしています。

3日間という限られた時間ではありますが、実習や教材研究に仲間と共に没頭した時間はかけがえのない経験になったと実感しております。本年度の初任者は、素直で、教育熱心で、一生懸命な者ばかりです。これからの活躍が大いに楽しみです。

初任者の宿泊研修の報告は以上でございます。

○小町教育長 報告ありがとうございました。

これより質疑に移ります。報告内容を踏まえ、ご質疑をお願いいたします。

はい、松野委員。

○松野委員 お疲れさまでした。今回、テーマを道徳の指導に絞ったというのもとてもいいですね。さて、こういう充実した3日間を経て、参加した初任者たちはどんな感想とか、その

後の意欲とか持ったのでしょうか。何かそういう声が寄せられていますか。ありましたらお知らせください。

○小町教育長 森山指導主事。

○森山指導主事 初任者の先生方は、初めてこういった社会人になったということで、こういう3日間を仲間と共に過ごすという経験は初めてだと言っておりました。

授業についても、1学期、苦勞していたという意見を分かち合うことで、あっ、お互いに同じような苦勞をしてきたんだ、ならばなお一層努力しよう。また、こんなふうに頑張っている先生方がいるんだという刺激をし合って、いい研修になったというふうに帰りのバスの中で申しておりました。

○小町教育長 松野委員。

○松野委員 同期ですからね、これからの研修についてもお互いに切磋琢磨できるような仲間でありたいですね。ありがとうございました。

○小町教育長 ほか、ございますか。田中委員。

○田中委員 非常に充実した初任者の先生方の宿泊研修だなということで今映像を通して拝見いたして、本当に感動しております。それぞれテーマをきちんと押さえながら、しっかりやっておられたのが非常に印象的です。とりわけ、役割授業であったり、つながりを大切にされた道徳、特別支援学級の道徳の授業を含めてされておりました。これを引き続き継続しておやりいただければと思います。

その上で私から3点ほど提言を申し上げたいと思います。

まず1点目でございます。今後ともこのような計画的・継続的な「考え、議論する道徳」の指導法の研修をなお一層推進していただきたいということをお願い申し上げます。平成28年7月に「道徳教育に係る評価の在り方に関する専門家会議報告」において、「特別の教科 道徳」の指導方法を活かした、これまで以上に3つの指導方法による学習の研修の充実を期待しているところでございます。

具体的に申し上げますと、1点目は、道徳的諸価値の理解を深めるために読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習、2点目は、道徳的な問題を多面的・多角的に考えさせ、子どもたちが生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するための資質・能力を養う問題解決的な学習、3点目は、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うための役割演技などを通じた道徳的行為に関する体験的な学習をこれまで以上に充実させることをお願い申し上げます。

したがって、この3つの学習は、子どもが教材に自我を投影し、自我関与させ、自分を見つめ、自分を振り返り、自ら道徳的諸価値の理解を深めていく道徳授業であると考えております。つまり、道徳科の特質そのものを追及した道徳授業がこれからのなお一層求められております。その上で、今後とも全小中学校の先生方が2年次研修以降の計画的・継続的な「考え、議論する道徳」の指導法の研修の充実を提言申し上げます。

続いて2点目の提言でございます。今後とも計画的・継続的な「考え、議論する道徳」の

評価の研修の充実をお願い申し上げます。先の専門家会議報告では道徳性の評価の基盤には、教師と児童生徒との人格的な触れ合いによる共感的な理解が存在することが重要であると指摘されております。つまり、評価の基盤には「理解」が重要であるということであります。また、学習指導要領の第3章には数値による評価は行わないことが明記されております。

そのためには、これまで学校の中でテストや競争を通した序列・選別・順位づけでの評価が行われてきたように思われます。それに対して「特別の教科 道徳」では「理解」と「支援」のキーワードを重視しながら、子どもの成長のための評価が重要であると考えております。

具体的に申し上げますと、道徳科における評価の形態としては、授業の評価、通知表、指導要録がございます。そこで授業での評価方法としては、第1に、子どもの学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に集積して学習状況を把握することによって、子ども自身による自己評価や教師の評価を活かしたポートフォリオ評価、第2に、授業時間に発話される記録や記述など、子ども自身のエピソードとして集積し、評価に活用するエピソード評価、第3に、子どもの発言や話し合い、ワークシートなどの記述をもとに、学習した知識や技能が生きた力として身に付いているかを評価するパフォーマンス評価、さらに教員同士で取り組み、指導に生かす評価の改善が求められると思います。

つまり、評価の基本的な考え方は、「子どものよさを認め、励ます」評価、同時に、子どもも教師も、そして保護者も、「評価があってよかった」と思えるような評価が重要であると考えております。それが「考え、議論する道徳」が目指す評価であると捉えております。したがって、今後とも計画的・継続的な「考え、議論する道徳」の評価の研修の充実をなお一層推進されるようお願い申し上げます。

最後の提言でございます。「特別の教科 道徳」については、1年次研修にとどまらず、2年次以降の研修の充実を進めてはどうかということでございます。

これまで学習指導要領にも盛り込まれてきました学習評価の3つの機能である「自己学習力からの向上」「指導と評価の一体化」「外部への説明責任」が、道徳科ではこれまで以上に求められると思います。したがって、「特別の教科 道徳」については、2年次以降の計画的・継続的な研修が重要となります。

以上の3点を提言申し上げ、私からのお話とさせていただきます。指導課の先生方、一生懸命で取り組んでいるものですから、私も拝見しながら、どういうことがきょうお話されるのか楽しみで、私なりに幾つかの提言を申し上げた次第でございます。

今申し上げたことについて、指導課の先生方、どうお考えでしょうか。よろしく願いたします。

○小町教育長 小瀬指導課長。

○小瀬指導課長 丁寧なご提言をいただきまして、ありがとうございます。この提言を踏まえて、また2年次、3年次以降の、計画的に研修また研究を進めていきたいと思っております。

○小町教育長 では私からも、初任者の研修ということで道徳をテーマに取り上げていて、と

でもいいかなと思っております。道徳は、考える、学び合うということで新しい道徳のスタイルを今追い求めているわけですが、考え、学び合うという点においては、他教科と違って答えが1つではないので、逆に言うと道徳を通して、そのクラスの中での学び合いと言いますか考える基本的なスタイルを培うのにとっても良い教科かなと思っております。道徳で自分の考えを人の前で発表したり、また、人の考えをしっかりと聴いて自分の考えを深めるという活動、その基本的なスタイルとして子どもの中に定着する、それが道徳を活かすという意味でとても大事なかなと思っております。

もちろん道徳価値をそれぞれの心の成長ということで一人ひとりの人格の完成目指して道徳をしっかりと学ぶということも大事ですが、その学びを通して、他教科での学びへの広がりというんですか、基本的な学びのスタイルの獲得にも私はつながる教科ではないかなというふうに思っておりますので、初任者がまず研修する科目としては、「特別の教科 道徳」というのは、そういった意味でいうと二重三重の意味でねらいとして、とてもいいのかなと思っております。

今後は、道徳というのは一つ学びの中で、学校教育の中で大きな柱にして、それを他教科にも活かしていく、それが考え、学び合う、まさに立川市の教育の基本的なスタイルを子どもの中に形成する、先生方の間でもそれを培う、とてもいい循環が生まれる起点になった研修ではないかなと私も思います。本当に森山指導主事含めまして、川崎統括指導主事も関わっていただいて、その他の先生方も多く関わっていただいて、とてもいい研修になったかなと思っております。今後もこの研修を活かして、さらに教員の力をつけていただければということをお願いいたします。

○小町教育長 ほかにございますか。田中委員。

○田中委員 今、教育長から非常に重要なお話があったと思います。それは「特別の教科 道徳」の取り組みが他教科の獲得にもつながると、そういう意味のお話をされていました。これについてはご承知かと思いますが、国立教育政策研究所含めて全国でいろいろな調査が行われています。そこで共通に見られるのは、道徳科と各教科とが非常に相関関係にあるんですね。つまり、道徳を重視することが各教科の学力を向上させている、そういう成果がありますので、これまで以上に指導課の先生方含めて各学校が一つ一つ丁寧に取り組んでいかれることをお願い申し上げます。

○小町教育長 ほか、ございますか。

〔「ありません」との声あり〕

○小町教育長 ないようでございます。これで報告 (1) 初任者教員宿泊研修について、の報告及び質疑を終了いたします。

◎報 告

(2) 平成30年度全国学力・学習状況調査の分析結果について ～授業改善のポイント～

○小町教育長 続きまして、報告(2)平成30年度全国学力・学習状況調査の分析結果について～授業改善のポイント～、を議題といたします。

小瀬指導課長、説明をお願いいたします。

○小瀬指導課長 平成30年度全国学力・学習状況調査の分析結果及び授業改善のポイントについて、ご報告いたします。

まずは立川市立小中学校の先生たち、また児童・生徒たち、よく頑張ってくれたなど思っております。

まずお手元のリーフレットをご覧ください。

表紙でございます。調査目的、対象学年、調査日、調査の内容と目次から構成されております。目次は、小学校国語・算数・理科、そして中学校国語・数学・理科の順に調査結果と問題の分析、そして授業改善のポイントを示してございます。

一枚おめくりいただいて、1ページ目、小学校国語、Aが上段、Bが下段です。その正答数分布と習熟の早いA層から習熟の遅いD層まで、学力ステップアップ授業に入る前の平成26年度と比較してございます。

小学校国語A問題、正答数分布の山は右側にございます。また、対26年度比較におきましても、A層の割合は5.7ポイント増加しております。逆に習熟の遅いD層の割合は2.8ポイント減少しており、基礎的・基本的な知識・技能の定着が進んでいることが分かります。

また、(2)小学校国語Bでは、26年度比較において、これびっくりです、A層の割合が11.7ポイント増加しております。習熟の遅いD層の割合は6.2ポイント減少しており、根本的な見方、考え方、思考・判断・表現力が伸長してきたことが分かります。特に、補足説明ですけれども、ポイント数で1.5プラス、また逆にマイナス1.5は、ほぼ同じと。1.5以上ですと相関関係が捉えられるということで、非常に大きく今回頑張ってくれたと思っております。

2ページをご覧ください。

これは国語A、Bの設問の概要とその正答率を示しております。これは先生方が一目見て、あっ、この問題は習得率が高かったな、逆に、あっ、こういう問題で学習のつまづきが見られるんだというふうに分かるようにいたしました。

3ページをご覧ください。

授業改善のポイントとなる国語のA問題、そして下段が国語のB問題、問題の概要とその分析を表わしたものでございます。

4ページをご覧ください。

3ページで取り上げた国語Bの問題をそのまま使って実際に授業をどう展開したらいいか、発問や板書計画を載せたものでございます。以下、同じページになっております。

5ページをご覧ください。

小学校の算数A問題、上段のほうですが、これも26年度比較で、習熟の早いA層の割合は11.8ポイント増加しております。逆に習熟の遅いD層の割合は6.1ポイント減少しており、基礎的・基本的な知識・技能の定着が進んでいることが分かります。また、小学校算数B、

これは驚いたのですが非常に授業改善が進んでいると思います。26年度比較でA層の割合は、これ、びっくりです、17.1ポイント増加しています。逆に習熟の遅いD層の割合が12.2ポイント減少しており、数学的な見方、考え方、思考力・判断力・表現力の伸長が見られます。

7ページをご覧ください。

算数A④の問題です。問題を読みます。答えが $12 \div 0.8$ の式で求められる問題を、要するに $12 \div 0.8$ という式の意味です、下の1から4までの中から、すべて選んで、その番号を書きましょう。1番「1mの重さが12kgの鉄の棒があります。この鉄の棒0.8mの重さは何kgですか」2番、「0.8Lで板を12㎡ぬることができるペンキがあります。このペンキ1Lでは、板を何㎡ぬることができますか」、以下、省略して読みませんが、何が求められるかという、数学的表現である式から日常生活の問題場面を想起できるか。また言い換えるなら、式から、式の表わすその意味を捉えることができるかをみる問題です。ただ計算ができるようにするというのではなく、式のもつ意味自体をはからせることが重要となります。

9ページをご覧ください。

小学校理科の問題です。理科というのは毎年、毎年実施されるわけではないので、一番直近のときが27年度、と比較してございます。習熟の早いA層の割合は、10.8ポイント増加し、習熟の遅いD層の割合では8.2ポイント減少しています。このことから、科学的な見方、考え方が育ちつつあるということが分かります。

11、12ページ、同じ構造になっております。

13ページをご覧ください。

中学校国語です。特にB問題のほうに着目していただければと思っております。言うまでもなくB問題というのは思考力・判断力・表現力、知識・技能を活用する力でございますが、対26年度比較で習熟の早いA層は15.6ポイントです。これも驚きました。逆に習熟の遅いD層の割合は3.2ポイント減少しています。徐々にではありますが、国語的な見方、考え方というのが確実に身に付きつつあるということが言えます。

17ページをご覧ください。

中学校数学です。こちらもB問題に着目したいのですが、活用の問題で、26年度比較で習熟の早い層であるA層の割合は13.7ポイント増加しております。逆に習熟の遅いD層の割合は6.9ポイント減少しています。このことから、生徒たちに数学的な思考力・判断力・表現力等が確実に身に付きがあるということが言えるかと思えます。

19ページをご覧ください。

実は小学校と同じ意味内容ですが、問題を読みます。数学A④(4)でございます。「ある日の最低気温は -3°C で、その前日の最低気温は -7°C でした。ある日の最低気温がその前日の最低気温からどれだけ高くなったかを求める式として正しいものを、下のアからエまでの中から1つ選びなさい。」ちょうど算数の先ほどのA問題と逆パターンになっております。これが単なる計算問題であれば、正答率はたぶん80%近くになるかと思えます。しかし、このように実生活の場面で日常事象を数学的に表現すること、言い換えるなら、式とその意味

内容を把握できるかという問題に非常に大きな学習のつまずきが見られます。小学校算数A問題と同様、ただ計算するという技能だけではなくて、ちゃんとその式の意味する内容を理解して数学的表現による解決力が求められます。

21 ページをご覧ください。

中学校理科の問題であります。これは対 27 年度比較、直近が 27 年度です。A層では 0.2 ポイントと微増です。0.2 ポイントということですから、微増としては捉えられない、統計的には。しかし習熟の遅いD層の割合は 4.4 ポイント減少しています。

続きまして 25 ページ、26 ページをご覧ください。

これは児童・生徒質問紙調査の結果と平均正答率の相関を示しています。今回取り上げたのは、算数、数学科で、特に先生方に意識していただきたいのですが、授業で、問題の解き方や考え方が分かるようノートに書いていますか、言い方をかえると式と答えだけではなくて、ちゃんと解き方とか考え方が分かるようにノートに書いていますかと。理科では、自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てていますか。また、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか、という質問に対して、それぞれ回答ごとの平均正答率①「当てはまる」から②③④の「当てはまらない」までを示しております。

特に算数B、数学Bの活用問題においては、当てはまると回答した児童・生徒と、いや、当てはまらないと回答した児童・生徒の平均正答率が、何と小学校のほうでは 15.3 ポイント、中学校においても 13.1 ポイントの差がありました。解き方や考え方が分かるようにノートに書く児童・生徒ほど高い正答率であることが分かります。

続きまして 27 ページの 14 番、①を見ていただけたらと思います。

「朝食を毎日食べていますか」という質問に対して、平成 25 年度と比較して、「食べている」と回答した児童の割合は残念ながら 3.4 ポイント減少しております。生徒の割合においても 2.3 ポイント減少しています。また、「食べない」と回答した児童の割合は 0.7 ポイント、生徒の割合は 0.4 ポイント増加しています。今後、より一層、関連諸機関との連携を図るとともに、家庭の理解と協力を得ながら、児童・生徒の基本的な学習習慣を確立できるよう指導の徹底を図っていく所存でございます。

27 ページの②をご覧ください。

これは規範意識でございます。「学校のきまり・規則を守っていますか」という質問に対し、平成 25 年度と比較して「守っている」と回答した児童の割合は 3.8 ポイント減少しているものの、こちらはびっくりいたしました。生徒の割合は、学校のきまり・規則を守っているが 10.7 ポイント増加しております。この 5 年間で特に中学生生徒の規範意識の向上が顕著になっているということが捉えられるかと思えます。

今後、「特別の教科 道徳」において、小学校は今年度、全面実施でございます。中学校においては平成 31 年度、全面実施となります。今まで以上に「特別の教科 道徳」を要として教育活動全体を通して道徳教育を実施し、規範意識を確立していく所存でございます。

続いて 28 ページをご覧ください。

「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか。」という質問に対して、平成 25 年度と比較して、「関心がある」「どちらかといえば、関心がある」と回答した児童・生徒の割合は、児童は 1.8 ポイント増加、生徒の割合は 4.6 ポイントも増加しております。また、「関心がない」と回答した児童の割合は 1.4 ポイント減少、生徒の割合は 3.7 ポイント減少しています。平均正答率との関連で見ますと、「関心がある」と回答した児童の正答率と、「関心がない」と回答した児童の正答率は 20.2 ポイントの差がございます。同様に、「関心がある」、「関心がない」と答えたそれぞれの正答率、中学生でございます、12.5 ポイントの差がありました。いわゆる立川市民科の学習等、学力との相関関係があることが分かります。

地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある児童・生徒の割合が増加した背景として、平成 27 年度から市内全小・中学校で立川市民科を全校展開したこと、また、平成 29 年度から市内全小学校で多摩武蔵野検定、また、市内全小・中学校で普通救命救急講習の実施などの取り組みによるものと考えております。

29 ページをご覧ください。

これは平成 29 年度と 30 年度、カリキュラムマネジメントがどれくらい進んでいるかというふうな目安でございます。見ていただくとおわかりのように、1 番、2 番の項目とも 30 年度のほうが着々と進んでおります。学習指導要領全面实施に向けての準備が各校整っていると捉えることができます。

最後 30 ページをご覧ください。

これは見ていただくと、仮説をもとに観察・実験計画、先ほどは正答率で見たのですけれども子どもたちの意識です。①のほうは、実はこれは学校側の意識です。学校側の意識で小学校ですと 52.6%が「よくしている」と、36.8%は「どちらかといえば、している」というふうな答えです。中学校のほうも同様です。22.2%、66.7%。

では子どもたちのほうはどうだったのか。見ていただくと、子どもたちが自分自身「よくしている」というのが 34.1%、37.4%が「どちらかといえば、している」と。学校では「あまりしていない」というのが 5.3%ですが、児童のほうは、20.8%は「あまりしていない」と答えています。生徒質問紙も同様です。中学校の学校側は 11.1%は「あまりしていない」、66.7%は「どちらかといえば、している」と。でも生徒の意識としては、35.7%が「どちらかといえば、している」と。「あまりしていない」は 33.1%あります。

2 番も同様の結果が出ています。これには先生方と児童・生徒の意識、この辺にも学校の先生方に気が付いていただきたいなと思って提示したものでございます。

最後、裏表紙をご覧ください。

16 番は、各教科、領域全てに共通する授業改善のポイントです。(1)(2)、今 ver.3 までまいりました。そして(3) 新聞や調査問題を教材として活用してほしい、なぜ新聞、調査問題ですかという、(1)の①②③の視点から授業を行うことができるメリットがあるからでございます。

17 番は、カリキュラムマネジメントで、評価の視点、ACTION改善の視点から今後ど

のようにカリキュラムマネジメントを行ったらよいか示したものでございます。

報告は以上でございます。

○小町教育長 報告ありがとうございます。

これより質疑に移ります。報告内容を踏まえ、ご質疑をお願いいたします。

はい、田中委員。

○田中委員 今、報告を伺いまして、本当に授業改善が進んでいること、そしてまた思考力・判断力・表現力が身に付いてきていること、また「この結果を見て驚きました」とか、「確実に身につけてます」とか、それがピンピン伝わってまいります。心から御礼を申し上げたいと思います。

これの大きな成果の要因は何かと言いますと、裏表紙にあります各教科等における授業改善のポイント、(1)の、授業に、次のような場면을意図的・計画的に設定する、これが地道に一つ一つ取り組まれてきたなということを感じます。(2)の「立川スタンダード20ver.3」に則った授業を展開する、本当に当初どうなるかなと私も非常に危惧しましたが、ここ2年、3年と重ねるにしたがって非常に力がついてきたな、そのような実感を教育委員訪問の中で感じております。また、(3)にあります、新聞や調査問題を教材として活用し、授業を展開すると。これもちょうど同じ時期に報告がございました。これも確実に各学校が取り組んでいるんだな、そんなことを強く受けまして、改めて心から御礼を申し上げます。

その上で私から何点か申し上げたいと思います。

まず2ページをご覧ください。主に小学校の調査結果をもとに申し上げたいと思います。小学校国語A問です。設問番号5、春休みの出来事に関する文章から、主語と述語がうまくつながっていない文を選択し、述語のほうを正しく書き直す問題は、正答率が立川市は42.7ポイントで実に全国平均の7.2ポイント上回っております。このことは文章中の主語と述語の関係が適切に捉えられ、正しく文を書く力が確実に身に付いてきていることで高く評価しているところです。

次に同じ2ページの小学校国語B問をご覧ください。設問番号2二です。「おすすめする文章」の給食の献立の1品を勧める記述式問題は、3種類の資料を読み解きながら、虫歯を防ぐ効果を詳しく書く必要があります。この問題でございますが、立川市の正答率は14.2ポイントで全国の平均に対して0.5ポイント上回っております。このような記述式問題は、特に複数の資料から目的に合った情報を抜き出し、まとめる学習が必要となります。したがって、今後の指導の授業改善をお願いしたいと思います。

次に6ページをご覧ください。小学校算数A問です。設問番号4(1)と5(1)、そして8について申し上げます。

4(1)の二つのシートについて面積と座っている人数から「混み具合」を比べる問題ではございます。立川市の正答率が84.4ポイント、5(1)の180度の角の大きさを問う問題も94.6ポイントと非常に高い数値を示しております。面積や図形の基礎となる「角」の知識が確実に定着していることが伺えます。これに対して8の問題ですが、会場に集まった子どもたち

のうち小学生の割合を求める問題では、正答を選択したのが 55.7 ポイント、これは百分率の理解が不十分な状況が見受けられます。今後の課題解決への授業改善をお願いしたいと思います。

次に同じ 6 ページの小学校算数 B 問の 3(1) です。メモ 1 とメモ 2 は、それぞれの棒グラフのどこに着目したのかの問題でございます。立川市は正答率が 24.9 ポイントで全国と比較して 4.2 ポイント上回っております。しかしながら B 問は全体的に応用力に課題が見られると思います。これらの課題解決のために、なお一層の授業改善をお願い申し上げます。

最後でございます。10 ページをご覧ください。小学校理科 2(3) でございます。川岸の浸食に関する実験結果から理由を記述する問題でございます。立川市の正答率は 18.9 ポイントと低くなっております。やはり大事なのは、知識重視の授業から実験結果に基づいて考える授業の転換が十分進んでいないのではないかと、そう思っております。これらの課題解決への一層の改善工夫をお願い申し上げます。

私のほうからは気付いた点を申し上げました。よろしく願いいたします。

○小町教育長 ほか、ございますか。松野委員。

○松野委員 ぐんと伸びてきましたね。特に C、D 層が減ってきた分、A、B 層がぐんぐん増えていった状況がよく分かります。私も学校訪問した時に、ある校長先生と話したのですが、全国の平均を超えたことで大変喜んでおられて、さあその要因は何か、やはり立川スタンダードなんですね。そしてもう 1 つは、スタンダードだけではうまくいかない、学級経営の安定、この両輪があつてです、という話を聞きました。私も全くそのとおり。やはり学級が安定して、子どもたちがのびのび学べなければ学力の向上もないということで、私改めて今回の立川の子どもたちあるいは先生方、頑張っているのは、その要因となっているのは指導課が示しているスタンダード 20、そしてもう 1 つは、学級経営のあのグラフでありますね。あれを見ながら先生方も学級経営の改善を行っているわけでありまして。そういう成果だろうと思いました。

され、これを見ていきますと、立川スタンダード 20ver. 3、このことによって各校がこれをもとに自分たちの学校のスタンダードもまた考えている、こういうところに先生方の意識の高まりがあるんでしょうね。そういう点では今後のもっと学力向上に期待する点では私、提言を 2 点したいと思います。

スタンダード 20、もっとバージョンアップする必要があります。というのは、報告書の最後のページに出てくる 16 番、各教科における授業改善のポイント、指導課長もおっしゃっておりましたが、関連付けて読み取る、あるいは根拠をもった説明、こういった学力向上に関わるようなこれから求められる知識・技能であります。これらをどうやって組み込んでいったらいいのか、あるいはノート指導の問題ですね。こういったものを組み込みながら、もう少しバージョンアップ、スタンダード 20 を上げていったらどうかなという気がいたします。これは現場でもたぶん納得し、受け入れ、なおかつ励んでいくだらうなと期待しているところであります。

第2の提言であります、一番最後のページにあります(2) ACTION (改善) のところの④「何が身に付いたのか」学習評価、であります、私はこれ、実に重要と思っているんですね。先生方も子どもも一生懸命勉強するんだけど、では何が分かって何が身に付いているかということは検証できないでいる。特に、授業はだいぶねらいが具体的にになりましたから、それもだいぶ改善されつつありますが、先生方が一番授業を進める校内研究ですよね。校内研究も市内各校で先生方も大変ご努力いただいているのですが、私いつも気になるのが、この研究で子どもたちに何が身に付いたのか、これをもっと明瞭にできないのか、それがこれからの学力の向上にも大きく、つまり学校での授業での取組あるいは指導の方法や工夫に大きく影響するのではないかなというふうに思います。

もっと具体的な研究をしながら具体的な評価をし、そしてこのことがもっと子どもたちの学力向上につながっていくような、そういうふうに進められればいいなと思っているところでもあります。是非また機会がありましたら現場での指導をお願いしたいと思います。

○小町教育長 ほか、ございますか。佐伯委員。

○佐伯委員 大変しっかりとした調査をなされていて、どんどん改善をされている様子がよく分かります。私気になることが1つだけありまして、それは1ページの国語ですが、例えばAもBも全体的には上がってきているのですが、Bに関していうと若干、C層、D層の中でC層が増えている。A層、B層の中でA層が増えている。やはり基本的にはC層がB層に上がっていくという、階段状に左にきれいに上がっていくような状態で皆さんが上っていくのが望ましいのかなと思うのですが、上と下が少し分かれてきてしまうみたいところは、やはりそこで変な、逆に差がついていってしまうようなことはないのかなと思って少し心配になったりしますが、是非こういうグラフにも目を通していただいて、C層からB層に上がる生徒もたくさん出るような授業改善を是非、進めていっていただきたいと思います。

○小町教育長 ほか、ございますか。伊藤委員。

○伊藤委員 まずはこの結果というのはとても喜ばしい形になっていると思います。ただ、1年だけなのかということがありますので、2年の企画ですけれど、これがもう一つ、例えば29、30、31というように比較ができて、それがどんどん上がっていってくれるようにお願いしたいと思います。

○小町教育長 ほかは、ございますか。

授業改善と補習という形も含めまして、各学校で取り組んでいただいた成果が表れてきたのかなというふうに私も捉えております。今後とも、きょう様々ご指摘いただきましたので、立川市の子どもたち、まだ可能性は大いに持っていると思っていますので、それに我々の、教育環境をどう整えて、現場で頑張っている先生方をどう支えるかということをしかりと戦略を練っていききたいなと思っています。

そんな中で、平成30年度は地域未来塾含めまして新しい事業を既にもう走り始めておりますので、常に施策を更新していくということの中で子どもたちの可能性を広げていきたいなと。その一つの成果が出てきたかなと捉えています。もちろん年度によって子どもたちのブ

レはあるわけでございますけれども、傾向として読み取るということはとても大事だと思っておりますので、数字に一喜一憂というよりも、正答率分布含めまして、かつてはふたこぶということで、下のこぶがかなり大きかったわけですから、そういうことを考えるとかなり正規分布になってきたということで、立川市の学力がまさにスタートラインに立てたのかなというような思いでいっぱいでございます。今後はさらに取組を深めて、充実させていきたいと思っておりますのでございます。

ほか、ございますか。

〔「ありません」との声あり〕

○小町教育長 それでは、報告(2)平成30年度全国学力・学習状況調査の分析結果について～授業改善のポイント～、の報告及び質疑を終了いたします。

◎報 告

(3) 就学相談に関するアンケートの実施について

○小町教育長 続きまして報告(3)就学相談に関するアンケートの実施について、を議題といたします。

矢ノ口教育支援課長、お願いいたします。

○矢ノ口教育支援課長 それでは教育支援課より、就学相談に関するアンケートの実施について、報告をいたします。

教育支援課では現在、平成29年度を初年度といたします第2次特別支援教育実施計画に取り組んでいるところでございますが、その計画を策定中でございました28年度当時、教育委員会の点検評価におきまして、今後、相談対応力の向上を図るため、相談者の利用後の満足度を把握するためのフィードバックアンケートの実施を検討することが望ましいと評価委員の方よりもご指摘をいただいていた。そこで、計画の開始時期と合わせまして、29年度就学相談より、利用者に事後の満足度アンケートを実施することにしたものです。

対象となった方は、平成29年度に本市の就学相談を利用された保護者117世帯のうち、相談が途中で中止になった方や市外に転出をされた方などを除く88世帯です。概ねどの小中学校におかれましても、1学期終了前後に個人面談の機会などを設けていただき、就学後の様子や課題を共有する振り返りの場があることから、本調査はその期間の後、夏休み期間中に配付、回収いたしました。有効回答数は44件で、回答率はちょうど50%でございました。

回答の集計結果につきましては資料1としてまとめておりますので、配付した資料をご覧ください。なお、回答者の個人が特定されないことや、プライバシーに配慮する観点から、調査は無記名式で行い、自由意見部分については公開を控えておりますのでご了承ください。

回答結果から読み取れます主なポイントをご紹介します。

まず就学相談のきっかけでございますが、小学校、中学校ともに保護者がお子さんの状況を気にかけてお申込みにつながったという回答が多くを占めています。また、在籍している園や学校、主治医からの勧めも背中を押すきっかけになっているということがうかがえます。

初回面談の満足度としては、相談員の第一印象や話しやすさというのがポイントの比重が高い反面、お子さんの生育や個人情報の聴き取りに1回目は多くの時間を費やすため、その時点での十分な情報提供をこちらから差し上げること、また保護者の不安が軽減することについては、まだ十分でないとの評価をいただいています。

特別支援学級や特別支援学校を見学した方の多くが、クラスの雰囲気や授業の様子が分かった、学校の設備や教室環境が分かったと良かった点を挙げておられますが、お子さんによって興味、関心や、得意、不得意の偏り、初めての環境に慣れるまでに時間がかかる特性などをお持ちの方が多いことから、また、就学先を迷っている保護者が見学に行かれるということもあり、観たい授業科目が選べるとよかった、通常の学級も含めて学校全体の様子をもっと知りたかった、校区以外の学校も見学できるとよいといった回答も目立っています。この回答につきましては、授業の体験に対するご要望でも同じような傾向が表れております。

就学相談のプロセスごとの満足度で、最も満足点が低くなってしまったのは、発達検査や医師診察の受けやすさ、費用面でございます。専門の医療機関の混雑状況や予約の取りにくさ、診断書の作成等にかかる保護者の負担があること、また、子ども未来センターで発達検査や医学診断を受ける場合にも日時の制約などがあることから、ポイントの低さにつながったものと考えられます。

就学相談のプロセスの中で非常に大きなイベントとなりますのが就学支援等検討委員会の提案結果をお伝えするというところでございます。結果を聞いた時の保護者のお気持ちとして「希望どおりでホッとした」との回答は半数にとどまり、約半数の保護者は不安やショック、提案への疑問を感じている状況がうかがえます。

就学先の決め手としては、家族で話し合ったというのが多くを占めている中、恐らく今後相談員に求められるスキルとしては、ただ伝えるだけではなく、保護者のリアクションを受け止める、また合意形成を円滑にするためのスキルというのが求められてくると思っています。また就学相談の現在の情報提供の中では、十分ではございませんが卒業生や在校生の保護者の体験談、口コミというののもかなり大きなポイントとして挙げていらっしゃいます。

提案のお返しの仕方の改善点としては、半数の保護者が「審議の経過や委員の顔ぶれを教えてください」「個人情報の開示請求なしで相談資料のコピーがほしい」など、透明性や妥当性、納得感を求めていることが分かります。

就学後の学校生活の満足度としては、担任の先生のご理解や相談のしやすさというポイントが高い反面、校内での情報共有が十分でなかった、統一的な対応をしてほしかったなどのご意見も目立っており、今後、学校への引き継ぎの在り方について課題をいただいています。学校への引き継ぎに関する改善点としては、どんな内容が引き継がれているのか分かりやすくしてほしい、また、就学後の先生方も、就学前の様子を実際に見に来て、その担任の先生から話を聞くなどしてほしいといったご意見も目立っています。

就学相談全体に関する満足度を100点満点でご評価いただいた場合、全回答者44人の平均点は78.1でございました。10点未満、一桁台を付けていただいた方もお二方いらっしゃいます。

ましたが、70点以上の回答が8割超を占めておりまして、100点満点と書いていただいた方も3名いらっしゃいました。概ね一定の評価をいただいているものと考えておりますが、この辺り、かなり極端なご評価をいただいた点については、様々今後の対応を検討する必要があるというふうに考えています。

自由意見を含めました総括といたしまして、4つにまとめております。

まず1点目は、就学相談の役割やどこまで対応できるかといったことについて、より一層丁寧な保護者への情報提供が必要と考えております。一般的な相談対応であれば、保護者主導で回数や頻度、間隔、また、どういった相談をしていくかということが保護者主導で進んでまいります。就学相談の場合には一定のステップや決まったスケジュール、出さなければいけない帳票類などがあり、かなりこちら市側の主導で進むことがございます。

また、保護者のご要望全てに沿った回答になるわけではなく、ときには保護者の意に沿わないご提案を差し上げるなど、保護者にとっては他の相談と異なる点もあります。その辺り、就学相談でできること、できないこと、また、受けていただくメリット、デメリットについて、保護者にとって分かりやすい情報提供と相互理解が必要と考えています。

2つ目は、特別支援学級や特別支援学校の見学や体験の在り方について、設置校との十分な連携や事前の準備が必要と考えています。見学や体験は学校が開庁している授業中に行うため、当然、学級や学校のご都合に合わせて時間帯や入れる授業科目などを選んでいきますが、なかなか保護者が観たいところ、受けていただく児童生徒の状況に合った科目では必ずしもない点などがあり、その辺り、理解いただく必要があると考えています。また、受け入れをしていただく学級、学校にとりましても、どんな児童生徒が見学、体験に来るのか、もう少し踏み込んだ情報をよりほしいといったご要望もいただいております。今後、設置校との十分な協議をしていきたいと考えています。

3点目は、就学支援等検討委員会の判断結果の伝え方に対する工夫や改善についてです。就学相談の過程で収集されている情報の中には、非常にセンシティブのものを多く含んでおり、本市の個人情報開示制度におきましては、「開示できない場合がある」とされている「個人の評価、診断、判定、指導、選考、相談等に関するもの」に該当するような非常にセンシティブなものもございます。これをお伝えする際には、これまで相談員からの口頭による説明や情報の閲覧といった形で説明を行ってまいりましたが、やはり就学後の円滑なスタート、また保護者との納得感、合意形成、また、就学後の理解をお願いする際には何が引き継がれ、何を保護者をお願いしたくどういった支援、指導が必要なのか三者できちんと正確に把握をしていく必要がございます。今後どういった情報提供、情報共有をしていくことが望ましいのか、また本市の情報開示の制度に沿う中で、その範囲の中でどういった手段、考えられるのか、一層の検討が必要と考えております。

4点目が就学後の継続相談の実施について、目的や効果、対象者の検証が必要と考えています。平成29年度からは就学相談を充実させる一環として、就学後1年程度は相談を継続していく必要があると、就学支援等検討委員会で判断が出た方について現在も相談を継続して

おりますが、ただ件数としては、それ以前の児童生徒数対象者の3倍に上っています。就学後も相談ができる、必要があれば心配ごとをすぐそのときに相談ができると継続相談を歓迎される保護者がいる一方で、なぜそれをやるのか分からない、就学後、何度も子どものできていないような状況を聞かされて負担であるといった声も寄せられており、なぜ継続相談をやるのか、在籍校と保護者、また子どもとできちんと共有しながら進めていく必要があると考えています。

このアンケート、初めての試みでございましたが、この実施したアンケートの取り組みを踏まえまして、まず今年度、早速取り組むものと、来年度以降に向けて準備するものについて考えてまいりました。まず今年度すぐに実施するものとしたしましては、この結果については、校長会・副校長会、特別支援教育コーディネーターの先生方をはじめとし、就学前の保育園や幼稚園、また関係機関等に周知をしながら、ホームページ等にも掲載し、今後ご利用いただく保護者の方にも是非、参考にさせていただこうと思っています。

特別支援学級や特別支援学校の見学・体験を行う際の事前準備を円滑にする情報として、これまで可能な範囲で学校要覧等のコピーをお渡しすることをしておりましたが、保護者からはより細かい情報の提供を求められていることがあり、可能な範囲でホームページ等掲載されている情報なども付加しながら、資料集のようなものをこちらで管理をいたしまして、お求めに応じて相談員がすぐ提供できるようなツールを用意してまいりたいと思っています。

また、相談につきましては年長さんになってから周知を始める就学相談の説明会、これまでも5月に行っておりましたが、保護者によってはもっと早くから準備をしたい、4月に申し込んだときには資料提供が十分でなかったとの声もあったことから、31年3月の段階で、これから年長さんを迎える保護者の方、年中の保護者の方を対象に就学相談の周知啓発を行っていくことを考えています。

来年度以降、31年度に向けて検討を準備していくものとしては、就学相談、4月からスタートをしておりましたが、この開始時期についても、説明会の時期と同様、変更検討が必要と考えております。

また、初回面談の効率や有効性を高めるため、保護者のニーズをよりの確に把握できるような受付票を開発してまいりたいと考えています。保護者によっては、もう小学校に入る時に就学相談を経験しているのであまり細かい説明は不要であるといった方もいらっしゃる、初めてで不安が大きいので一つ一つ丁寧に説明をしてほしいといった、かなりニーズに差がございます。

また、就学に関するご要望だけでなく、放課後子ども教室や放課後のデイサービス、学童保育などについての情報を就学相談のときに入手したいと考える保護者もおり、相談員がどこまで情報を準備しておくのかということについても、今後検討が必要と考えています。また、自由意見の中でございました保護者の口コミや体験談等の提供につきましては、育成団体が開催している先輩保護者の体験講演会や、保護者同士のおしゃべり会などが開催されている機会を活用し、市とどのような連携ができるか、団体の代表の方と協議をしていきたい

と思っています。

就学支援部会の記録や就学支援等検討委員会の審議の経過についても、詳細の提示を求められている保護者が多く、今後その提供の在り方についても検討してまいります。

就学相談といたしましては、今回初めての試みでこのアンケートを実施いたしましたが、これを踏まえ、相談の質の維持・向上を図るため、今後も定期的・継続的な研修を開催するなど努めてまいりたいと考えております。

教育支援課からは以上です。

○小町教育長 報告ありがとうございました。

これより質疑に移ります。報告内容を踏まえ、ご質疑をお願いいたします。

はい、松野委員。

○松野委員 調査目的にある相談対応力の向上や相談者の利用後の満足度、これを目的としてやられたことに私はすごく意義のある調査だったなと思います。そしてまたこの受け止め方、分析の仕方、これもとても謙虚で、いいですね。より良く改善していこうという意欲を感じます。

私、気になったのは2点あるのですが、1つは、相談対応力の向上に関わる点であります。2ページにある就学支援等検討委員会の就学先の提案で、ホッとしたが5割、約半数が不安、この辺りなのですが、その改善案として年中児からのことも出ておりましたが、私は、就学相談前にもっと、もっとそういう相談機会ができないのか、それから、就学相談の案内チラシ、パンフレット、このことにもう少しいい情報を加えられないのかなと思いついておりました。

第2は、就学支援等検討委員会で就学先が決まってホッとしたわけですが、今度は校内、入学した後ですね。就学支援ファイルの内容共有、この配慮に少し差があったんですね。これはやはり親御さんにとっても、学校には行ったものの一番不安材料でしょうね。この辺りはもっと、もっと学校現場と一緒に努力しなければいけない点ですから、この辺りも即、前向きに行けるなという気がいたしました。要するに、一番不安を抱えられている就学相談、このことをもっと、もっと、冒頭に言いましたように、より改善できるような方向にもって行っていただきたいというのが私の要望であります。

○小町教育長 矢ノ口教育支援課長。

○矢ノ口教育支援課長 貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。

まず1点目の、より早期に、より丁寧にといいご提言でございますが、この早期にということに関しては、これまで年長さんになったらということにかなりこちらもこだわる反面、4月1日解禁日のような形で、そこを迎えるまでは何も情報が入手しにくいといった面もございました。今後は年中さんに向けても、保育園・幼稚園の先生方が年中さんになって同時にお勧めするのに難しさがあるといった声もいただいておりますので、年中さんのうちに情報提供どこまでできるのか、就学前の機関とも是非この情報も踏まえて検討していきたいと考えています。

また現在、就学相談をお申込みいただきますと就学相談のご案内といたしまして、この40ページ程度の小冊子を差し上げていますけれども、保護者の方からは、申し込みをしないともらえないというところについても、これを踏まえて申し込みをするかどうかを検討したかったといったご意見をいただいています。その辺りの情報の提供の時期などについて、また情報量、これについても是非いい形で改善ができればと思っております。

もう1点、情報のファイル、引き継いだ後の共有でございます。保護者の多くの方は就学相談を受けて就学支援ファイルが引き継がれていただのおかげで、学校内の教室の配置であったり、あるいは担任の先生が非常に経験豊富な方が当てられていたり、その辺り、ありがたかったという声が大半ではございますが、ただ中学校などのように教科ごとに先生が替わってしまうと、担任の先生は情報をよく分かっていたんだけど、音楽の先生はうちの子の感覚過敏で音の過敏さがあるということを知っていただいていたというように、たったお一人だけでも、えっそうだったんですか、というような声があると大変残念で、それが校内で共有していないというような大きい残念さにつながっていた点もございます。

多くの学校は大変取り組みについては改善、充実をされてきていまして、就学前の園を訪問されたり、行事などで行き来をされたりということは、ずいぶんと取組を活発にされているという印象もございます。ただ、保護者の方が期待をしているレベル感となりますと、なかなかまだそこまで一致していないのかというふうにも思っています。

就学支援等検討委員会の結果のお伝えの仕方で、半分が「ショックだった」「不安があった」というお答えについても、これまで提案結果の仕方が、どこの就学先が適切と判断されたところが優先になるあまり、そこに就学した際に、どんな支援なり指導なり、この子の可能性を伸ばす学習をしてくれるのか、その部分の指導、支援なりのヒント、また学校への教育委員会からの指摘、引継ぎが十分に聞きたかった、そちらのほうをメインに期待していたので、どこに行けばいいかということより、知りたいことがもっとあったというようなご指摘もございました。この辺りも審議の経過をどこまで深めてお伝えをどんな手段でしていくかということにつながる点だと思っておりますので、今後どう改善していけるのか考えていきたいと思っております。

○小町教育長 ほか、ございますか。伊藤委員。

○伊藤委員 丁寧なアンケート、そしてその分析、本当に感心いたしました。ありがとうございます。今、松野委員からもお話がありましたが、就学支援等検討委員会からの提案という中で、「東京都内の平均では、1割程度の児童が提案と異なる就学先を選択しているとの統計があり、本市はその2倍である。」、2倍であるとポンと切つてあるんです。何かそこでコメント等ございましたらお聞きしたいと思います。

○小町教育長 矢ノ口教育支援課長。

○矢ノ口教育支援課長 就学相談をお受けいただく際の説明会の席でも、保護者の方から、「必ず教育委員会が言うとおりにしなければいけないんでしょうか」といったご質問、大変多くいただいています。その中で私たちは今までの情報提供という立場から、就学支援等検討委

員会の結果をお返ししたそこと同じ就学先ではない就学先を希望されている方も、例年この程度おいでになっています、というような情報提供をしますと、保護者の方は、じゃあそういうこともできるんですね、ということで一つ選択肢を広げられるというところはあろうかと思っています。また、立川市の場合、特別支援学級も、また通常の学級におきましても、学校支援員や特別支援学級の指導員など、かなり潤沢に応援の人材を入れているということがございまして、保護者の方はいろいろ見学、体験などをされる際に、この環境であれば、うちの子厳しいと思っていたんだけれども、もうちょっと頑張れるのではないか、応援してもらえるのではないかということで、大変に期待もされるというようなことはあろうかと思っています。

東京都内の平均値の中ですと、大体10%未満9.5%程度というのが数年前の平均値というふうに都からは聞いていますけれども、その中では保護者の方がなかなかご納得いただけない際には、教育委員会の提案自体を保護者の方のご希望に沿うようにお出し直して統計を変えているといった苦肉の策の市町村もあるというふうに伺っていますので、立川市はかなり何と云うんでしょう、正直に情報提供もカウントも含めて、やっているものと考えております。

○小町教育長 伊藤委員。

○伊藤委員 十分理解ができました。また就学後の継続相談の実施についても、いいという方、意味がないというような発言もあったと思います。いろいろなご意見があるとは思いますが、けれども、継続してご相談にのるということはとても大切なことだと思いますので、これ以後も頑張っていただければと思います。

○小町教育長 ほか、ございますか。田中委員。

○田中委員 今、課長のほうから、概ね一定の評価を得ましたということで、私も全くそうだなと思って高く評価しているところです。その上で私の感想として1点、質問が2点、提言を3点申し上げたいと思います。

最初に感想でございます。これについては、時代は、「障害者の権利に関する条約」の批准を受けて、立川市は3月議会で「立川市障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちをつくる条例」を採択し、4月1日付で条例が施行されました。清水庄平市長自らが、「障害のある方への理解を深め、差別解消に向けた取り組みを推進しなければならないと改めて決意しております」と、力強い抱負を語っておられました。この条例を踏まえて、社会全体が本格的に本人の教育ニーズ、保護者の教育ニーズにいかに対応するかが真剣に問われている時代になっております。そういう中で立川市民としても、また教育委員会、学校、家庭、地域としても、これまで以上に本格的な人権感覚、人権意識が問われているものと考えているところでございます。

その中で特別支援教育においては、人権問題の視点から就学相談は大変重要な場であると、そのように受け止めております。それはなぜかと申しますと、特に1点目は本人自身・保護者自身の意識改革、2点目は医療・福祉・教育関係者の意識改革、3点目は社会の意識改革、

この三面性をもつからだと私は考えています。したがって、本アンケートをもとに、その三面性が如実に反映されていたのではないかと評価しているところでございます。

次に、質問2点でございます。

最初の質問でございます。本アンケートの中で、自由意見を含めた総括、に記載されている就学相談の内容で保護者や本人に「開示できない場合もある」ということはどういうことですか。またその理由はどのようなことですか。これについては、就学相談は保護者の意見を十分に尊重すべきだと私は考えております。「個人の評価、診断、判定、指導、選考、相談等に関するもの」を除外すると、何が残るのか非常に危惧をしているところです。誤解される可能性があるならば説明を十分にして、保護者はもとより、本人に公表すべきが筋ではないかと思えます。本人・保護者は、事実を知らないで納得して判断することはできないと思えます。したがって、就学相談の内容で保護者や本人に「開示できない場合もある」とは何ですか、またその理由は何でしょうか、ということについてお伺いします。

2点目でございます。本アンケートの「就学相談の申込みのきっかけ」の中で、小学校では「発達や行動が心配で」、中学校では「学習や生活面が心配で」と記されております。その内容は何かということでございます。

本アンケートでは「発達や行動などで心配があつて」が小学校への就学では9割を占めております。基本的には就学相談では当然であり、中学校でも同じような項目を設ければ同様の問題が推測されるのではないかと思えます。「心配がある」ということが前提で保護者の方は相談に来られるわけですが、そのためにもその内容であるアンケートの結果の分析も異なってくるものと考えております。小学校では発達や行動などの心配、中学校では学習や生活面で心配の内容がございますので、その辺りについてもう少し具体的に教えていただければと思います。

最後に提言3点でございます。

1点目、特別支援学級、特別支援教室キラリにおいて、児童生徒本人の見学、体験の機会の増加をしてはどうかということでございます。

2点目です。特別支援教室キラリ対象の児童、また特別支援教室の生徒本人の要望、希望を十分に把握してはどうかということでございます。

3点目です。就学支援シート、個別の支援計画、個別の指導計画等々の作成・活用・保管の合理化と、本人・保護者の参画への一層の推進をしてはどうかということでございます。

以上3点、提言をさせていただきました。これについて、どのようにお考えでしょうか。

○小町教育長 矢ノ口教育支援課長、お願いします。

○矢ノ口教育支援課長 ご意見ありがとうございます。とても細かい所も読み込んでいただいて、私どもとしても大変励みに思っております。

まず、ご質問いただきました1点目の「開示できない場合がある」、この個人情報でございますが、大前提といたしまして、就学相談をお受けいただいて収集されて作成いたします就学支援ファイル自体は、保護者の方に全て内容を開示いたしまして閲覧いただいております。

ただいたもの、これとこれを小学校、中学校に送ることに同意をされますかということで、一つ一つどんな内容が含まれているのかというのはお目通しいただいて、納得いただいたものを丸をつけていただいて、サインをいただくというのが大前提でございますので、全ての保護者の方に閲覧はしていただいております。

ただ、その中には、閲覧した結果、「うちの子、こんなではありません、書き直しをしてください」とか、「これを書いたのは一体誰ですか。正しく評価されていません」といったことで、なかなか保護者の抵抗感や不安が強くて、それをきっかけとして「うちの子、こんなふうに思われていたんですか」ということで、「今、担任の先生は何も言ってくれないのに、うちの子、こんなだったんでしょうか」ととても不安になってしまうような保護者の方もおいでになります。

その辺りは園からの情報をいただきながら、閲覧の仕方などについては私たちも言葉を添えながら、「これはでもいただいたときの4月の様子で、この1年間でずいぶん伸びましたよね」など、補足をしながらお話をしていきますけれども、保護者が開示の結果、訂正や、あるいは削除を求められた場合に、そのまま上の小学校、中学校に引き継いだ際、十分な支援がかえって受けられなくなってしまう恐れがあるもの、ここへは心配がないです、削除してくださいと言ってそのように削除をした場合に、支援が得られにくくなるということは児童本人、また保護者にとっても利益ではないというふうに考えていますので、その際には、送るものの中で、ここの部分についてはその辺り、もしかしてお子さんにとって不利益になってしまう情報の不完全さがあるかもしれないというご説明はしつつも、場合によっては、その恐れがあるときには開示できない場合もあるというような名目で、お見せしないこともございます。

原則といたしましては、皆さん閲覧はいただいておりますが、園からは、なかなかこれについては保護者の方にお見せするのが難しい。ただどうしても小学校に引き継いでほしい、そのほうがこのお子さんにとってより力を伸ばし、より支援の手立てになるからといったことは、やはり園からもきております。

私どもとしては、その折衷案として、保護者に見ていただいても大丈夫なような記載を保育園や幼稚園の先生方にいかに取り組んでいただくか、お子さんにとってできないとか分からないということではなく、どうしたらできるか。今、園ではこんな工夫をしていて、今はまだこれからだけでも、今後こういう支援があればできる可能性がある、といった書き方に変えていただくなど、就学支援ファイルの作成についての研修会など開催しているところです。田中委員ご指摘のように、保護者の方が十分に納得をされたものを引き継いでいくというのは大前提ではございますが、場合によっては現状、なかなか難しさはあるといった実態がございます。

2点目の、アンケートで項目といたしました選択肢の小学校では発達や行動、中学校では学習や生活面といったことで記載した内容でございますが、これは小学校で対象にしています未就学児、年長さんの保護者については就学相談を発達や行動などに心配のある保護者

の方、お受けくださいといったお勧めを広報でこの文言を使っております。また中学校の場合には、就学後の教育相談をお勧めする際に、学習や生活面で心配がある方、などといった広報をしていることでより保護者の方がピンとくるフレーズを選択したということがございます。

ただ、委員ご指摘のように、どういった保護者がお気持ちを抱えていらっしゃる、どう分析をしていくのかということころは、もしかすると汲みきれない設問の在り方だったかなという点もございます。何分にも初めてのアンケートでございまして、こういった選択肢の一つ一つの作り方も勉強しながらの途上でございます。今後、参考にさせていただきたいと考えております。

また、小学校のこれから就学相談をお受けになる方は、入学して大丈夫かどうかという、まずは入学というのが目の前に控えたイベントで、自分の子どもの発達の曲線や取組のスピードなどについてご心配のある方が多い反面、中学校の場合には、中学校が心配というよりは、むしろ卒業後の自立についてどんなふうを考えて中学校またそのさらに卒業後を、どう考えていくのかというのを主に心配されている方が多いということがございまして、このような設問になった次第でございます。

それから、ご提言いただきましたまず1点目の特別支援学級と特別支援教室等の見学、体験の機会の増加でございます。現在、特別支援学級につきましては、概ね1回から2回、本人も含めて見学、体験の機会をつくっております。なかなか初めての場で慣れなくて、集団に入れなかったという方については体験をもう一度開催したり、また、就学支援等検討委員会の結果を聞くまでは考えてもいなかった就学先の提案があったので、改めて提案を聞いてから体験をし直すという方もいらっしゃいまして、相談の状況に応じて、そこは設定しております。ただ、いかんせん受け入れていただく学校のご協力もあるところですので、回数をどこまで増やせるかというのは、まだ十分でない面も一方ではございます。

また、特別支援教室キラリにつきましては、現状、個別の指導がかなり多くなっており、感覚過敏や、また初めての場、知らない人に緊張の強い児童を取り出しているということもありまして、現在は自由な見学、体験という場をつくれていない状況です。保護者の方からは、どんなところで指導しているのか是非知りたいという声は多いものですから、現在は全ての小学校に設置しているということもありまして、小学校の入学説明会などの機会、また、就学時健診などで未就学の保護者の方がいらっしゃったときに、是非、特別支援教室キラリのお部屋も見てお帰りいただくように、ルートを設定してくださいというようなお願いをしたりしています。

2つ目の特別支援教室が対象と思われる児童生徒の要望等について、でございます。この引継ぎに関して、小学校から中学校ということに関しては、現在ちょうどこの時期に開催しておりますが、中学校の通級指導学級説明会を開催いたしまして、施設の見学や6年生のうちからの、前倒しての体験をしながら、6年生のうちに4月に入ってすぐ利用できるように判定審査会を設けていくということを行っております。ただ、小学校の場合には、園が評

価をしている状況と実際に1年生に上がるところでは若干、園の総体評価に園によって差がみられるといった状況はございます。その園の環境、その先生との関係の中では今現在こういう状況だけでも、1年生に入ったところでは、また違った評価になるという場合もございます。

また、東京都の特別支援教室のガイドラインについては、この障害の状況、あるいは数値であったり診断名だけではなく、まずはレベル1、担任の先生が指導支援についてどう工夫すると改善するのか。またはレベル2、外部支援員、例えば学校支援員や介助員さんのような方がそこに加わっていくことで改善が見られるのかどうか、その辺りのレベル1、レベル2を取り組んでみてから、それでもなかなか難しさがある場合に、レベル3として特別支援教室での一部特別な指導を検討していくという流れになっております。保護者の方がより早くからキラリを利用されたいということで就学相談と同時にキラリの入級決定も是非というご要望は大変に多く伺うところですが、まずは診断名や障害名、数値だけで決めていくのではなく、就学後の様子を見守りながら、相談は継続していく仕組みにつなげていきたいというふうには思っております。

就学後の個別の支援計画等については、統括のほうからお答えをさせていただきます。

○小町教育長 川崎統括指導主事、お願いします。

○川崎統括指導主事 それでは私は提言の3つ目、ウの「就学支援シート」「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成などの合理化と、本人・保護者の参画の推進というところについて考えを述べさせていただきます。

こちらの関係の計画の作成につきましては、今、学校でも取り組んでいただいているところでして、作成率はかなり伸びていると思っております。ただ、やはり課題があるのが、先ほどのアンケートでもありましたように就学支援シート、就学前のところの情報をどう学校の環境に応用していくかというような、そのつながりのところがやはり保護者が満足されるような活かし方がまだできていないというような課題があるかと思いますが、学校の状況がまだ保護者もよく分からない段階で、そのところをどう学校と相談していくかという入学前のそのところは非常に難しい部分もあるのかなと思っております。ですので、例えば1学期終わりの個別面談で保護者と就学支援シートの内容について、もう一度振り返ったりということで、その内容についてももう一度検討できるような機会をつくるということも一つの方法なのではないかと思っております。

また、計画を作成していく段階で、本人、保護者の要望等書く欄もちろん入っておりますので、それを進めていくことで一層の参画が進むのではないかと思っておりますので、こういう計画の活用、作成については、指導課のほうからもより一層進めていきたいと考えております。

○小町教育長 田中委員。

○田中委員 私のほうから質問について2点、提言について3点申し上げたわけですが、今の説明をお伺いいたしまして改めて取組の具体的な現状、また新たなその中での成果、改善点、

また今後の取組をどうすべきか、一つ一つ丁寧に、具体的に説明をいただきましたこと、本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

○小町教育長 ほか、ございますか。伊藤委員。

○伊藤委員 今のお話を伺いながら、子どもの治療に関しての立場として少しお話をと思って手を挙げました。例えば3歳児健診というのがあるのは、3歳というところは、適当に3歳ぐらいで検査をしておけばいいということではなくて、3歳前と後ではずいぶん変わってくるので、そこまでにどれだけいろいろなことができるようになっていくかということ来判断することによって、とても良い環境を整えることができる。今は大部分の幼稚園が3年保育となっていますけれど、3歳になってある程度1年経ちながら、いろいろな発育をしながら4歳で入るとというのが昔は一般的になっています。

ただ、障害をもっている子どもたちの中には、そのリズムが少し、2年ぐらい変わってきますので、大体5歳ぐらいから、人によっては6歳になって、小学校に上がってからずうっと変わってきて、とても能力を発揮してくれるというところもありますので、なかなか幼稚園の先生が子どもたちの判断をするというところで、その判断は正確にみているなど思っている、お母様はなかなか受け入れられないということもありますので、先ほどのような一部開示できないというところがあるのも十分理解はできると思います。やはりそのことを信じて、これから先どんどん変わってくるということを知って、この相談をうまく活かしてあげながら、いい学校生活を送れるように、これからもご指導いただければと思います。よろしく申し上げます。感想です。

○小町教育長 ほか、ございますか。

〔「ありません」との声あり〕

○小町教育長 それでは、報告(3)就学相談に関するアンケートの実施について、報告及び質疑を終了いたします。

◎その他

○小町教育長 その他に移ります。

庄司教育総務課長、お願いいたします。

○庄司教育総務課長 それでは1点、報告でございます。

メール等で第一報として委員の皆様にも情報提供させていただきました。本日はお手元にご覧いただけます小中学校既存床スラブ厚の調査結果でございます。

第五小学校の既存スラブ厚さ不足を受けまして、同時期に施工された小中学校13校を対象に在数調査を実施いたしました。

調査結果は別紙のとおり、全校にスラブ厚不足がございました。いずれも構造計算上の不適合がございました。全調査数は2,479枚で、設計厚不足数は954枚でございました。そのうち構造計算による不適合の数は461枚という結果となりました。また、最小値は第一中学校の57mmという結果でございました。

全てを仮に補強するとなりますと、費用につきましては概算で約 31 億 5000 万円となります。また、完了するまでに相当の期間を要することが想定されます。補強工事は基本的には夏休みしかできませんので、夏休みに行く工事であることから、かなりの制約がございまして、また、試算をしまして、最大でも 1 校当たり年間 20 枚程度の補強しかできないと考えられまして、補強枚数が多い学校については工事期間が複数年、4、5 年かかるというようなこともございます。そういった学校運営に支障をきたすことも考えられます。

これを踏まえまして、工法、工期を含めた全体の対応策につきまして、改めて検討する必要がありますと考えております。今回は調査結果ということでお示ししているところでございますが、そういった内容でございます。

なお、昨日、文教委員会でもこの案件を報告させていただきました。かなりの委員さんから質問がありまして、例えば、当時の施工した業者の責任であるとか、安全性は担保できているのかとか、今後どうしていくのかとか、保護者への周知はどうしていくのか、丁寧に説明していくべきだというような、その他様々お話をいただきました。9 月 21 日の一社の新聞でこのことが大きく報道されました。ちなみに、直接、教育委員会事務局にお問い合わせというのはございませんでした。ほかの自治体からの問い合わせは数市からございましたけれども、直接私どもに声は届いてございません。

ただ、学校のほうには恐らく何件か問い合わせは来ているだろうと考えています。ですので、これは直接、児童生徒の安全に関わることでありますので、丁寧に説明していかなければならないなと思っております。そのやり方も工夫していきたいと思えます。ホームページや当該校の保護者に対してしっかり周知を行いながら、分かりやすい説明、分かりやすい報告をしていきたいと思えます。

説明は以上でございます。

○小町教育長 報告ありがとうございました。

これより質疑に移ります。報告内容を踏まえ、ご質疑をお願いいたします。

はい、田中委員。

○田中委員 子どもの安全・安心面から非常に大事な事案かと思えます。

1 点だけお尋ねしたいのですが、莫大な予算、先ほども説明がございましたように合計で約 31 億 5000 万の費用がかかると。これだけの費用というと相当の金額なわけですので、そういう中で、そうは言いながらも児童生徒の安全・安心ということを考えた場合に、今後のおよその見通しのようなものはどのようになってございますか、お尋ねします。よろしくお願ひいたします。

○小町教育長 庄司教育総務課長。

○庄司教育総務課長 見通しでございます。まず、今議会はまだ終わっておりませんが最終日、月曜日でございます。そちらにスラブ工事の設計の補正予算を 3 校分、計上をお願いしております。可決されるということになりますと、まず 3 校分をスラブの補強ということを前提に設計を組んでまいります。そういったことを市としてやっていくということでございます。

あくまでもこの3校分というのは単年度でできる、先ほど言った20枚ということでしたけれども、3校でございます。具体的には第六小学校、第八小学校、第九小学校でございます。

こちらの状況を確認しながら、設計を進めながら一方では、果たして本当に安全性はどうかという部分、現在でも学校自体は通常どおり授業を行っています。確かに57mmという学校もございましたが、この57mmは3階の天井部分でございます。一番上の部分でして、何か荷重がかかっているものではございません。そういった状況もあったりして、専門家の意見を聞いていこうというような話がございました。そういった意見を聞きながら、当然、補強するという前提でいろいろ動いているところでございますが、専門家の意見を聞いたり、様々市の中で検討を進めながら、補強に対してどう進めていくかということは今後検討していきたいということでございます。

また、公共施設再編個別計画というのもございます。また、特別教室の空調機設置という大きな命題もあったり、トイレの改修工事も同時並行でやっております。そちらとの影響もございますので、様々な複雑な要因が絡んでおりますので、そういったことも加味しながらスラブ工事、どのようにしていくかということに対応していきたいと思っております。

あわせて、第五小学校のように今度大規模改修を行う第七小学校でもスラブ厚の不足がございます。こちらは大規模改修の中でスラブ補強工事をしてまいりますので、そういった方法を取りながら、同時並行で進めながら、今後どのようにしていくかということは検討してまいりたいと思っております。

○小町教育長 ほか、ございますか。田中委員。

○田中委員 今説明をいただいた中で、今後、スラブの工事に当って様々な課題が想定されると思います。市民も含めて一番不安なのは、何が、いつ、どうなっているのか、見通しはどうなっているのか、その辺りを気にしていると思います。したがって、今後そういう工事含めて、予算も絡んでくると思いますので、それらについて一つ一つ丁寧な説明と情報公開をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

○小町教育長 松野委員。

○松野委員 状況はよく分かりました。いくら大丈夫とはいえ、やはり報道されたり、多少保護者にとっても不安な部分がありますので、この改善どうするのかということ具体的に早く打ち出すことが一番、保護者、地域の皆さんが安心するものになるだろうと思います。そういう点で早急な改善策をきちんと示していく、このことが一番必要と思います。

○小町教育長 ほか、ございますか。

いずれにましても児童が安心して学校に通える、とても大事な部分でございますので、教育環境を整えるという以前の、安全な場所にするということは大前提でございます。技術的な検証をしっかりした上で取り組んでまいりたいと思っております。ただ、基本的には、技術的な意見として私伺いましたが、梁というものは天井床にはございまして、その梁が構造体となっております、学校の建物はI s値といって要するに耐震性が普通の建物より高く設定されて、ですから普通、地震では倒壊しないというのは、たぶん学校は丈夫にできている

のかなと、それだけ基準が高いということでございます。ですから躯体そのものはそういった意味で担保されておりますし、立川市の場合は全部、耐震の補強も既に終わっておりますので、そういった面では直ちに崩壊するというものではございません。

梁がございまして、梁の間に床板を張るわけですが、そこに鉄筋が入ってまして、その鉄筋が梁とか壁とか柱とか、そういったところへ全部ジョイントしてございますので、そこにコンクリートがかぶせてあって、そのコンクリートの厚さがということで今回ございます。そのコンクリートが薄いとやはりたわみが出て、一部崩落というか、かけらが落ちるとか、天井を張っているとかけらが落ちても分からないですけど、そういうような恐れがあることは事実でございますので、そういったところをいかに効果的に補修ができるのか専門家の意見を先ず聞いてみたいかなと私は思っています。

それと一方、委員からもご指摘があったように、まず第一報としてこのような状況になっているということと、この状況は今申し上げたような流れの中での状況でございますので、それでパニックを起こしたり、そのようなことのないようにということで技術的な裏付けも含めまして丁寧に説明して、あとはしっかりと優先順位を決めて対応していきたいと思っています。いずれにしましても正しい情報の提供がまず第一かなと思っていますので、今後取り組んでまいりたいと思っています。

○小町教育長 ほか、ございますか。よろしいですか。

〔「はい」との声あり〕

○小町教育長 ないようでございます。それではその他で追加いたしました既存スラブの厚さ不足について、の報告及び質疑を終了いたします。

○小町教育長 ほかに、ございますか。

〔「ありません」との声あり〕

◎閉会の辞

○小町教育長 次回の日程を確認いたします。次回、平成30年第19回立川市教育委員会定例会は平成30年10月11日木曜日、午後1時30分から208・209会議室で開催いたします。

これをもちまして、平成30年第18回立川市教育委員会定例会を終了いたします。

午後3時15分

署名委員

.....

教育長